
ミッシング◎リンク

U B O B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミッシング◎リンク

【Nコード】

N2597R

【作者名】

UBOB

【あらすじ】

涼宮ハルヒの消失とサムデイインザレインの間の出来事。キヨンは谷口に呼び出され駅前へと自転車でこぎ出した……

大概の騒動というものはいつもハルヒが持ち込んでくる、あるいは連れてくるもの、そう思っていた俺なのだが、なんというか、ハルヒの絡まない偶然ってものもあるらしい。何故かと言えばこういう訳だ。珍しくSOS団の活動が休みと成った土曜日、つまり今日なのだが、たまには付き合えという谷口の口車に乗せられて、他にこれといってする予定も無かった俺は二つ返事で指定された待ち合わせ場所である駅近くの大規模商業施設へと向かうこととした。昨日電気ストーブを抱えて学校へと戻る時から降り始めた雨は深夜には冬の嵐となって吹き荒れていたが、その雨も今朝にはすっかり上がり路面は既に乾き始めていた。風で舞い散った黄色や赤に色づいた木の葉がしつとりと濡れて路肩に吹き寄せられている。そんな景色を見るともなく眺めながら自転車を走らせていた俺はふと異なった色合いの紙切れがそこに紛れ込んでいることに気がついた。決していつもハルヒに目を皿のようにしてそこら辺に隠れている不思議を見つけ出さない、見つけ出さないと死刑よと言われているからではないのだが何の気なしに俺は自転車を歩道に停め目にとまったその濡れた紙片をそっと拾い上げた。やっぱりな、冷たくびっしょりと濡れてはいてもそれはみつまたより生成された和紙に諭吉先生の絵姿が印刷されたまごう事なき一万円札であった。どこかで千円札は拾うなどかという本のタイトルを見たことがあるが一万円札ならどうなんだ？ ハルヒにたかられっぱなしの俺にとってこの金額は非常に大きい。古代遺跡の宝の地図やUFOの部品なんぞよりは余程安全で発見取得する価値のある物だとは思わないか？ 一瞬警察に届けるといふ至極まともな考えが浮かばなかった訳ではない。小学校の頃の俺なら間違はなくそうしていたであろう。だが昨夜からの嵐と雨の中、ふと財布から取り出したこれを吹き飛ばされてしまったこいつの元の持ち主が警察に遺失物届けをするはずの無いであ

ろう事は高校生ともなった俺には十分推察出来るのであった。というわけでその濡れた紙片は俺の上着のポケットの中へと姿を消したのであった。

「よう、キョン。お前、今日も時化た面してんな。昨日みたいに涼宮の使い走りばかりしていると人生にとって一番大切な物をなくしちゃうぞ」

俺がしけた面をしているのはもうすぐ年末が来ようというのに男二人でファストフードのカウンターでコーヒーなんぞを啜っているからだ。そもそも人生にとっての大切なことからもっとも遠い生活を送っているお前にそんな事を言われたくはないぞ。

「何を言うんだ、高校一年の冬の一大イベントといえどクリスマスだ。そうだろう？俺はだな、クリスマスまでに可愛い彼女を見つけクリスマスデートをするって決めたんだ。どうだ、男子にとってこれ以上大切な物はないぞ。それに引き替えお前はどうか、涼宮に引っ張り回されているだけで自分じゃなにもしてないだろ」

言われてみれば、少なくとも傍から見ればそうなのかもしれない。だがお前にだけはそんな事は言われたくはない。別に彼女がいなくてもそれなりに、いや、非常にだ、俺は充実した生活を送っている。昨日不覚にも寝込んでしまい部室で目覚めたときにかけられていた二枚のカーディガンを思い出し俺はそう確信したのだがそのことを谷口に説明しようとは思わなかった。そこで俺はそうかいと適当に相づちを返すことにした。

「そこでだ、今日は俺様がお前にもちよつとばかり御利益を分けてやろうと思ったって寸法だ。この間の文化祭で俺はつくづく思った、俺たちの高校は絶対に立地条件が悪すぎる。そこで今度はこっちら下界に降りて暇そうにしている彼氏が欲しいけど彼氏がない、俺みたいに素敵な男性に声をかけてもらいたがっている可愛い子を探し出して親切にも声をかけてやろうというわけだ。どうせせいっすらも一人じゃない、つるんでるはずだからこっちも二人の方が都合

が良いだろう。どうだ、俺様のパーフェクトなプランに頭が下がるだろ、な、な、な？」

あほだ、こいつはパーフェクトなあほだ。こんなあほに引っかかる女子がいるとは思わないが万が一という事もある、こいつがあほ面を上げてそこのいらの女の子に言い寄っている隣に俺が立ち会っているのをこの世界にいる特定のある人物にみられたらどうしようもなくまずいことになりそうな気がする。駄目だ、絶対にこいつがナンプに成功するどころか女の子に声すらかけることが叶うなど有ってはならない、断じてさせてはいけない。

俺が心に強くそう念じたからかどうか知らないが谷口がめばしい女の子たちに声をかけようとしたり、近づこうとしただけで女の子たちは尽くどこからともなく連れ合いが現われたり、ずっと店の中に入って行ってしまったり、あるいは俺たちの存在がまるで目に入らないかのようにごく自然に通り過ぎて行ってしまったりとその戦果は散々たるものとなった。それに俺も付き合っていたのだから全くやれやれとしか言いようがない。

「キョンよ、お前よっぽど運が無いんだな。マジ、お前には涼宮の疫病神がうつってるじゃないのか」

谷口にこれを言われると何故だか無性に腹が立つ。俺のせいじゃない、谷口、お前の自業自得だ。俺に運がないんじゃない、それなら第一今朝拾ったポケットのなかの一万円札をどう説明する？だがそんな事を谷口に言おう物なら半分寄こせとか言い出すに違いない。俺は再び適当に相づちをうちだんまりを決め込むことにした。「だがな、お前に付き合っちゃって不運続きだったせいでキツと俺にはかなりの幸運が溜まっているはずだ。そうだ、俺、宝くじを買って帰るわ。キョンはここにいろ、絶対付いてくるなよ」

脳天気にも谷口は訳のわからん理屈をつけて道の向こうにある駅の改札横の宝くじ売り場へいそいそと行き、散々迷いながら宝くじを購入すると俺にピースサインを出しながら買った一枚の券を見せ

びらかしながら帰って行ってしまった。暇だとはいえせつかくの休日に付き合ってやったのに都合の悪いことは全部俺のせいだよ。まったくやってられない。だが本当に今日の俺がついているなら確かに宝くじを買ってみるのも悪くは無いかも知れない。もうすぐクリスマスともなればハルヒは絶対にプレゼントを寄せせと言うだろうし、いつも世話になっている長門と朝比奈さんにもそれなりのプレゼントを選びたいじゃないか。そのための軍資金が手に入るなら願ってもない事に違いない。という訳で谷口の姿が見えなくなると俺もそろりと宝くじ売り場に足を向ける事にした。

売り場のおばちゃんは今月末なんとかってのを勧めてくれたがどうやら抽選日はずっと先らしい。運試しならその場で結果がわかるものが良いに決まっている。俺がそういうとトリプルマッチとかいうスクラッチの宝くじを教えてくれた。おばちゃんが扇状に手元で広げた籤の中に何となく印刷の色がちょっと濃い物が混じっているのに気がついた。気になった俺はその色の濃い籤を3枚、計600円なりで購入すると早速その場でコインを出して削ってみたのだが、なんというか、最初の一枚は三等五千円、次のは二等三万円なりが当たってしまった。流石に俺は三枚目を削るのをやめるとおばちゃんに当りの券を差し出した。売ったおばちゃんもこんなに運の良い子は初めてだよ、あんた運が良いねえと言いながらその場で三万五千円を俺に寄こしてくれた。

遊び半分の運試し、どちらかと言えば冷やかして谷口を真似て買ったと言っても良い筈の三枚の宝くじのうち二枚が三等、二等と来て、そしてまだ確かめていない一枚。その残りの一枚を握りしめ俺は漠とした恐怖にも似た感情を味わっていた。谷口ではないがこれはツキすぎている。万が一残り一枚も当選していれば……一瞬俺は残りの一枚を破り捨てようと思っただけだ。傍観者的位置に甘んじる凡庸さを以て良しとしてきた俺にとってこれは少々荷が重いぜ。

だが結局破り捨てるほどの度胸も無く俺は駅の北口へと向かい、結局いつもの喫茶店へたどり着くと入り口左奥に空いた席を見つけそこに腰を下ろした。頼んだコーヒーを待つ間に意を決して残りの一枚の籤を削った。

嘘……だよな。物の見事に一等50万の凶柄が三つ揃ってしまっただじやないか。とは言えなんとも全く現実感が沸かない。ハルヒにでも相談しよう物なら億を狙って宝くじをジャンジャン買ってきなさいとか言われそうだし古泉ならハルヒがらみの要らぬご託宣をへらへらと振りまいてくれるかも知れないがそれこそ俺には無用に過ぎる。朝比奈さんならそれは素直に喜んで祝って下さるだろうがそれが俺にこの非現実的な出来事を受け入れる力になるとも思えない。家族に知らせても皆の一瞬のボーナスと消え去るだけで何の解決にもならないのは自明だ。やはり相談する相手はあいつしかない……か。

俺が携帯を手に取りその相手を選択し通話ボタンを押した瞬間、呼び出し音はおろかプツツとした電子ノイズも何もしないうちに低くくぐもった声が携帯のスピーカーを通して俺の耳に届いた。

「来て」

いつも何の説明もなく的確な事を最短の言葉で伝える長門ではあるが今日の素早さは群を抜いて異常だ。つまりは長門は何らかの事を知りある程度は状況を把握してくれているに違いない。俺は届けられたコーヒーに珍しく砂糖とクリームを加え手早くかき混ぜて大急ぎで二口ばかり口に含むと大急ぎで勘定を済ませると自転車で例のマンションへとひた走った。

通された居間、春先に俺が初めて訪れたときと全く変わらない殺風景な部屋の炬燵でいつもの制服にカーディガンをはおった長門と向かい合って座る。

「長門、昨日はカーディガン、有り難う。助かったよ。もう一着持ってたんだな」

「違う、取りに戻った。これは私の一部」

そ、そうか。そりゃ悪かった。昨日帰り道に届けてやれば良かったな。

「涼宮ハルヒはそれを許可しない」

そ、そうかもな。実はだな、今日は折り入ってお前に相談が会って電話したんだ。

俺がそう告げると長門は高速で何事かつぶやき、部屋の壁はほの暗い紫色のハローの様な光に包まれた。

「情報封鎖空間を形成した。情報の漏洩は非常な危機をあなたにもたらす危険性が極めて高い」

おののく俺に長門は平然と湯飲みに入った煎茶を差し出した。

「およそ何が起こしたかは承知している。だが情報の不足は判断の過誤をもたらす可能性がある。あなたの認識した内容を話して欲しい」
久々に経験するあり得ない状況の中、続きを促す漆黒の双眸に答えて俺は今朝からの出来事を逐一長門に語り始めた。

文字通り瞬きもせず人形の如く真っ直ぐに俺を見つめる長門に一通り話し終えたところで、話している途中に沸いた疑問をぶつけてみることにした。

「なあ、俺が危険に会うというのは、やはり幸不幸のバランスがどこかに存在するからなのか？」

俺の問いに一瞬首を軽く傾けた長門はこう続けた。

「運と呼ぶべき物は存在しない。存在するのは確率のみ。あなたが購入した宝くじの予定販売枚数は還元率から計算して三百九十二万三千七百七十八枚。このうち無作為に3枚の券を選択しそれが一等二等、三等になる確率は概算で4・09112かける10のマイナス13乗。我々のスケールでは起こりうる確率」

訳がわからん、本当に起こりうるのか？ それとも長門のジョークなのか？

「宇宙の歴史においてこの惑星の時間単位で一年につきたかだか2

00回3枚の籤を購入すれば起こる確率」

つまりは俺たち人間のスケールではおよそ起こりがたい確率である事には間違いが無いだろう。

「そう、だがその確率を限りなく1にすることの出来る有機生命体が存在する」

つまりハルヒか？ ハルヒは何故俺に宝くじを当てさせたり諭吉さんを拾わせたりしたんだ？

「そうであれば事態は容易い。だが涼宮ハルヒはあなたが宝くじを購入することを認識してはいない」

じゃ何故だ、誰がやった！

「やったのはあなた。昨夜からあなたの発する情報フレアが看過できないレベルに上昇している」

冗談じゃない、古泉じゃないが俺は骨の髄まで一般人だ。超能力者でも未来人でも長門みたいな対有機生命体用情報端末でもない。

「そう。だがあなたは昨夜涼宮ハルヒの存在を受け入れた。それにより涼宮ハルヒがあなたに注入した自身の能力の片鱗が発露したものと推測される」

ハルヒが俺に、いったい何時、何を注入したんだ？

「The Day of Sagittarius 3」

長門ははにかむようにそう囁いた。長門が大活躍してコンピュータ研のやつらをとっちめた、あのゲームだ。あの時活躍したのは一重に長門であり、俺もハルヒも殆ど何もしなかったはずだ。

「涼宮ハルヒは対戦前、あなたに力を注入した」

一瞬長門が何を言っているのか分からなかったが確かにそういえばハルヒの珍妙な顔を見させられた気がする。だがあれはもう随分前だ。あの時だって俺は何も感じなかったぞ。

「朝比奈みくるがレーザー照射機能を付与された際にもなんら自覚はなかった」

唾を飲み込もうとするが喉がからからにくっついている。手元の湯飲みをたぐり寄せくちに含むとその冷たさに話を始めてから既に

随分の時間が経っている事に気がついた。つまり今日の俺のくじ運はハルヒに与えられた力、俺は当り籤を引く力をハルヒに押しつけられたのか。正直不気味な気持ちだ。

「当選する籤を引くという限定された卑近な能力ではないと考えられる。あなたの言葉を用いれば願望実現能力」

駄目だ、全力で断固拒否する。俺はそんな力なんぞ欲しくはない。「我々ならずともこの力があなたの物となったことは早晚多数の勢力の知るところとなる。あなたはその力の存在を既に認識している故にそれらの勢力にとって涼宮ハルヒより遙かにコントロールしやすい存在と認識されるであろう。それは勢力間の力の拮抗を決定的に破壊するが故にあなたの争奪が生じ、あなたが一部の勢力に与したと判断されれば他の勢力はあなたの抹消を試みるであろう」

そんな馬鹿な、俺にそんな力があるわけがない。完全に思考停止を訴える脳みそに従い上の空で長門の言葉を聞いていた俺は先ほどの湯飲みを再び手に取った。熱い、何故だ。先ほどまで冷たかった筈の湯飲みに温かい煎茶がなみなみと注がれている。

「あなたが温かいお茶を望んだ、故にそこに温かいお茶がある。それがあなたの力」

本当なのか？ 長門が担いでるんじゃないのか？

「本当、信じて」

じゃ、俺がハルヒから益体な能力を押しつけられ、そのあぐく近い将来に俺は殺される、そうなんだな？

「そうは……させない」

そう言うとき長門は口を真一文字に結びどこか悲しげな表情で俺をじっと見つめた。何か方法があるのか？

「ある、一つだけ可能性のある方法がある。

あなたにも、私にも他に選択の余地はない。

許可を」

いきなり許可をとかわれても困る、どうするつもりなんだ？

「あなたの能力を私に譲渡して欲しい。私は自身の情報操作能力で

それを強化しより安定した世界を再構築する。涼宮ハルヒにもあなたにも願望実現能力が無く、未来人も超能力者も統合情報思念体も存在しない世界に全てを作り直す」

そんな、俺に与えられた能力はそんな事が出来るほどの力だというのか？

「そう」

だがそんな事をしたらハルヒがこの世から消え、長門も朝比奈さんもこの世から消えるって事なのか？

「涼宮ハルヒは能力を失っても涼宮ハルヒとして存在する。朝比奈みくるも、古泉一樹もあり得る形で存在している世界」

だから長門はどうなんだ、長門もちゃんという世界なんだよな？
「世界の再構築は極めて精緻な作業。まずあるべき姿の世界を構築し、しかる後その世界を過去の事象と齟齬無く限りなく連続した事象局面を形成しなければならぬ。ドミノで描かれた巨大なタペストリーの中央の一連の図柄を有るべき形に多き換え、その一つのピースを倒して全体の図柄を連続した新たな図柄になるように伝播させ倒していく作業と表現すればあるいはあなたのなかにアナロジーとして擬似的理解をもたらしことが出来る可能性があると判断する。ドミノがそのような倒れては困る勢力による妨害を始めアトラクタの崩壊をもたらす要素を除去する管理者の無い状態でこれを行わせることは不可能」

つまりそれが長門、お前だって言うことか。

「そう、そしてその管理者は完成した世界とは相容れない存在として消去されなければならない」

却下だ、対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェイスだかなんだか知らないがそんな特別な能力なんてない、ただの寡黙な読書好き女の子でいいんだ。長門、お前が文芸部室で待っていてくれない世界なんか俺は認めん。何か手がないのか？

俺の問いに長門は再び黙りこみ下を向いてしまった。だがよく見るとぐっと握りしめた長門の右手の人差し指の爪が長門の膝頭に深

く食い込んで何かを必死に押さえ込んでいる様に震えている。長門、何を隠しているんだ？

「自己消去型管理プログラムを無意識下バックグラウンドジョブに植え込んだバックアップインターフェースを用いれば……可能。だが危険を伴う。それに……」

何が何だかわからんが可能なんだな。長門、お前がいてくれればそれで良い。やってくれ。

「了承……した。だが、これは非常な危険を伴う。再構成された世界があなたの望みに沿わないならばSOS団部員を鍵として元に戻るリカバリーポイントを一カ所にだけ設置する。許可……を……」
わかった、まかせる。で、俺はどうしたらいい？

「何も。ただ私がそのように世界を再構築する力、望みを叶える力を持つと強く願ってくればそれでいい」

俺は半信半疑ながら冷たく小さな長門の手を両手で包み、黒水晶の様な瞳をみつめてそれを願った。

どれ程の時間が流れたのか、ふと気がつくあたりを包んでいた紫色の光は消え殺風景な長門の部屋の窓からは遠く市街の明かりが見える。ああ、もう夜になっているのか……

と、前に向き直ると俺はなぜか長門の手をしっかりと握りしめていた。何故だ、どうして俺はこんなところにいて長門に向き合いその手を握りしめているのだ？ そうだ、何か大事なことがあって長門の所へ来た、そんな気がする。待て、今朝から何があった？ 思い出せない。俺は慌てて長門の手を放した。

「済まん、長門、俺は何をしているんだ。思い出せない」

「あなたは昨日のカーデガンのお礼を言いに私の所へ来た。それだけ」

そ、そうなのか？

「そう」

言われればそんな様な気がする。

「あなたの状態の不良が認められたため私はそれを修復した。記憶の欠落はその副作用。もう問題はない」

そういえば昨日は無茶をさせられたから俺は風邪でも引きかけていたのかもしれない。それに気づいた長門が治してくれたって訳か。なんだか炬燵の上に小銭かなにかを出して置いた様な気がするが何もない、思い過ごしだろう。俺は長門に礼を言おうと無駄に思い煩うことをあきらめて帰途へと着いたのだった。

帰り道、ハルヒからメールが来た。

「昨日はお疲れ様。

ありがとう」

俺が昨日聞いたかった言葉。ハルヒの奴、何を今更。そう思いつつも頬に何故か微笑みが浮かんでくるのを俺は禁じ得なかった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2597r/>

ミッシング©リンク

2011年3月20日21時28分発行